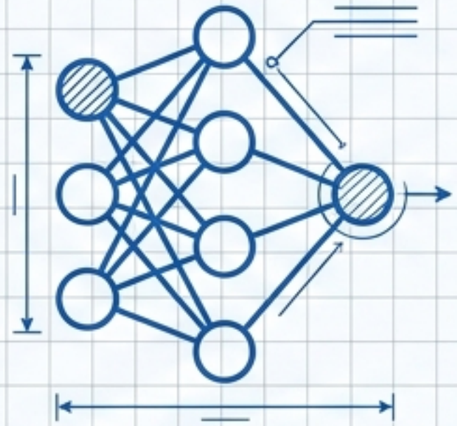
独立評価レポート (Independent Assessment Report)

IPRally 技術・ビジネス解剖レポート

グラフTransformerの真価と、日本企業が直面する構造的リスク

2026年7月版

エグゼクティブ・サマリー：光と影

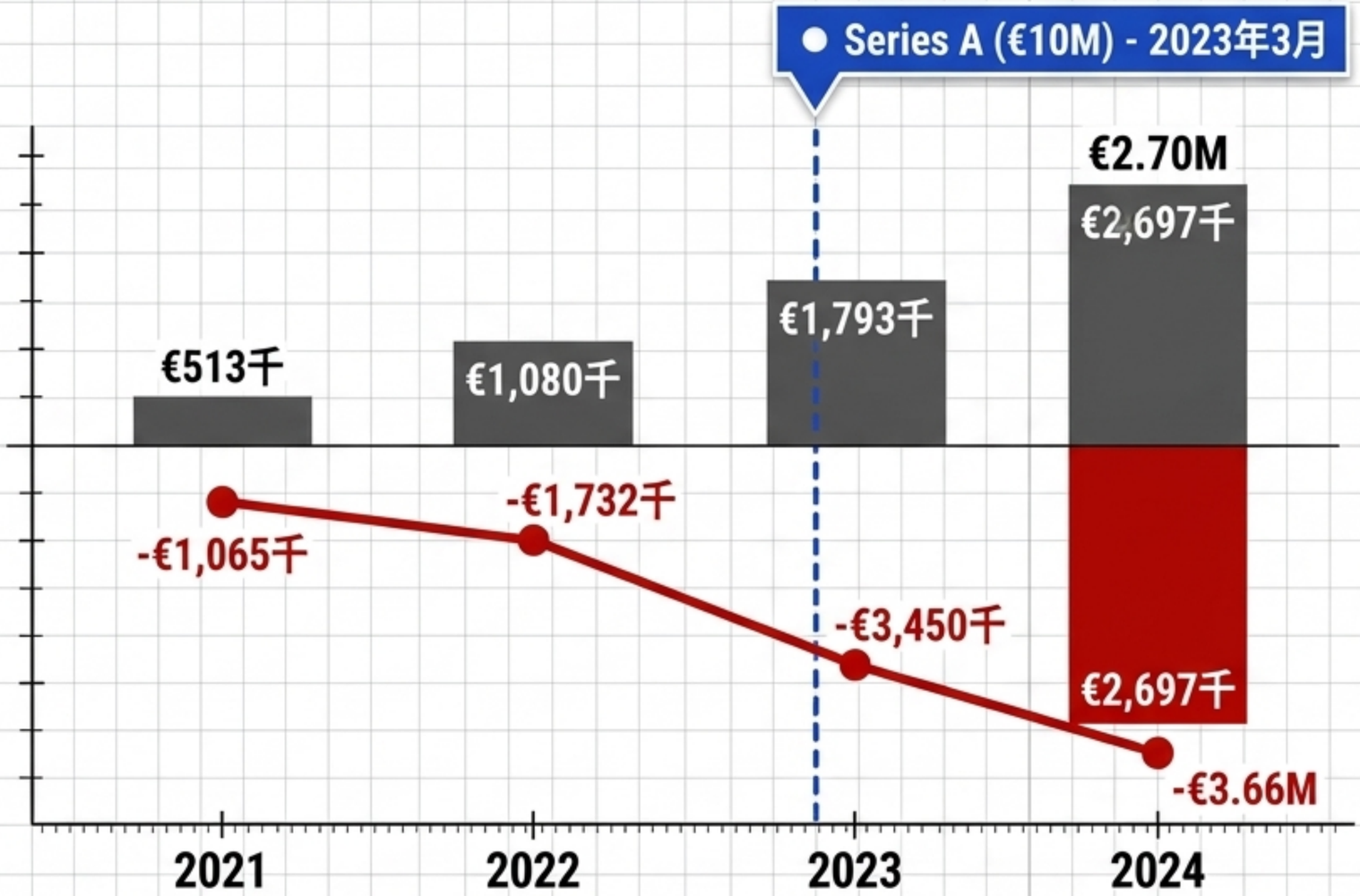


- 汎用LLMではなく特許特化の「Graph Transformer」
- 驚異的な計算効率（30ページを600ノードに圧縮）
- 勾配ベースの完全な説明可能性（XAI）

- データカバレッジの致命的狭さ（58法域、無料ツール以下）
- 検索履歴・監査証跡の欠如（FTO調査に不適合）
- 資金面の不確実性（3年4ヶ月間、新規調達公表なし）

結論: 探索的リサーチには極めて優秀だが、監査証跡が求められる防御的調査（無効化・FTO）の主軸には適さない。

企業体力とタイムリミット



資金燃焼の現実 (The Burn Rate Reality)

- 2023〜2024年の2年間で約€7.1Mの営業損失。
- €10Mのシリーズ A資金は相当量消費された計算。
- 以降、3年4ヶ月間にわたり次期調達の公表なし。

示唆: 素晴らしい技術を支える「企業体力」に懸念。FY2025決算の確認が必須。

[技術の光] 極限の計算効率（Graph Transformer）

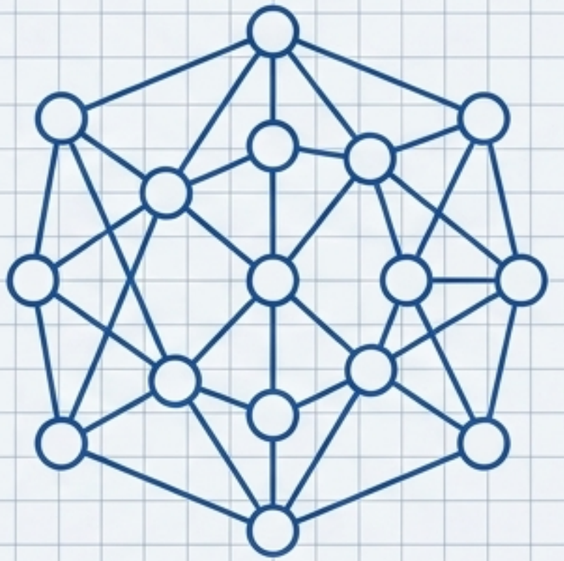
汎用LLMのアプローチ:
テキスト全文処理

計算コストが極めて高く、技術的関係性がノイズに埋もれる。
（約10,000トークン）

圧縮率 1/16以下

1.3億件のインデックスを単一ノード（約78GB）に収める異次元の効率。

IPRallyのアプローチ - Graph Transformer:
特許特化 Graph Transformer

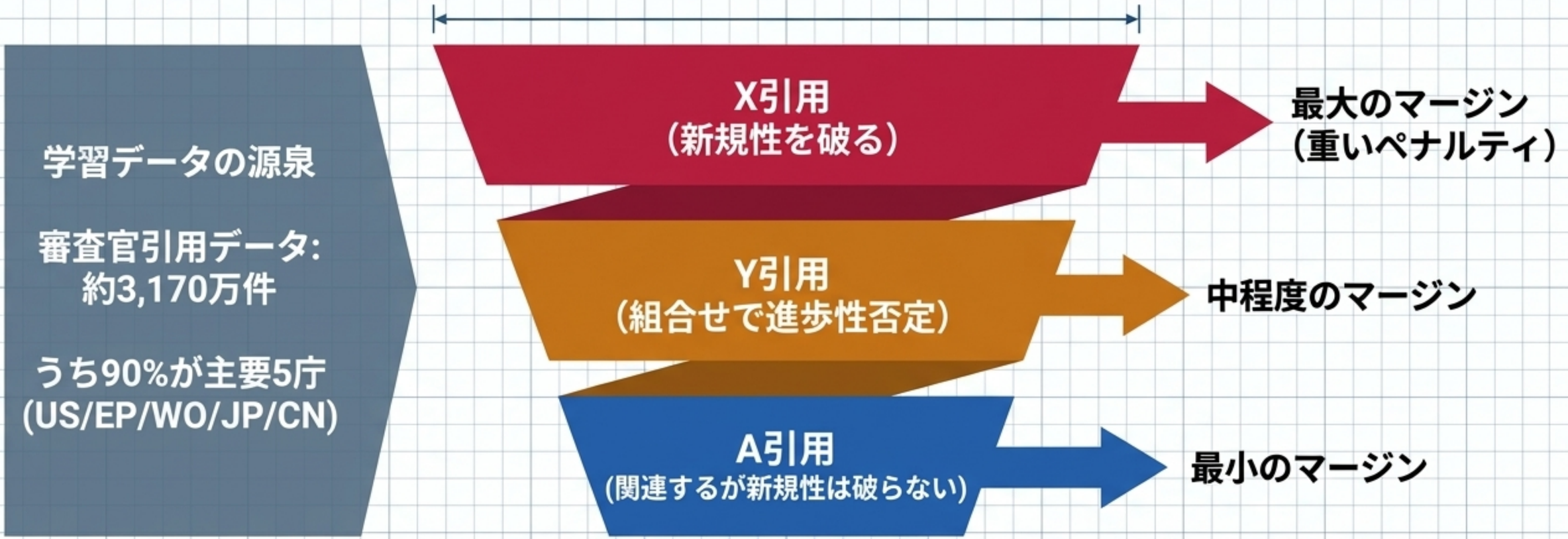


特許特有の「特徴（ノード）」と「関係性（エッジ）」のみを純粋に抽出。
（約600ノードに圧縮）

結論: 汎用LLMには模倣できない構造的・コスト的優位性を確立している。

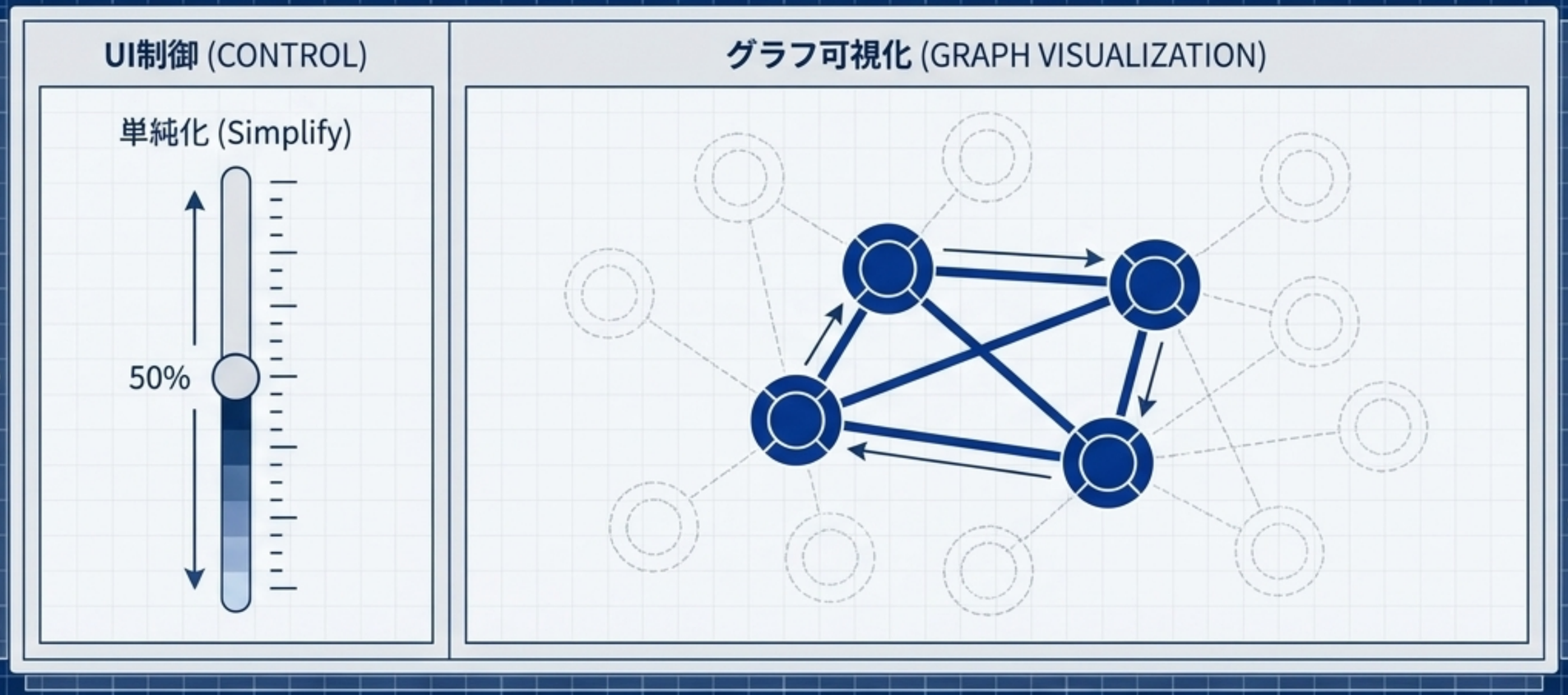
Editorial Forensic Blueprint

[技術の光] 最大の堀「学習データ」



核心: 単なる「類似文章」を探すのではなく、世界中の審査官の「拒絶のロジック（序列）」をAIの損失関数（Triplet Loss）に直接マッピングしている。これがIPRally最大の技術的堀（Moat）である。

[技術の光] 本物の「説明可能性（XAI）」



勾配ベースのサリエンシースコアリング

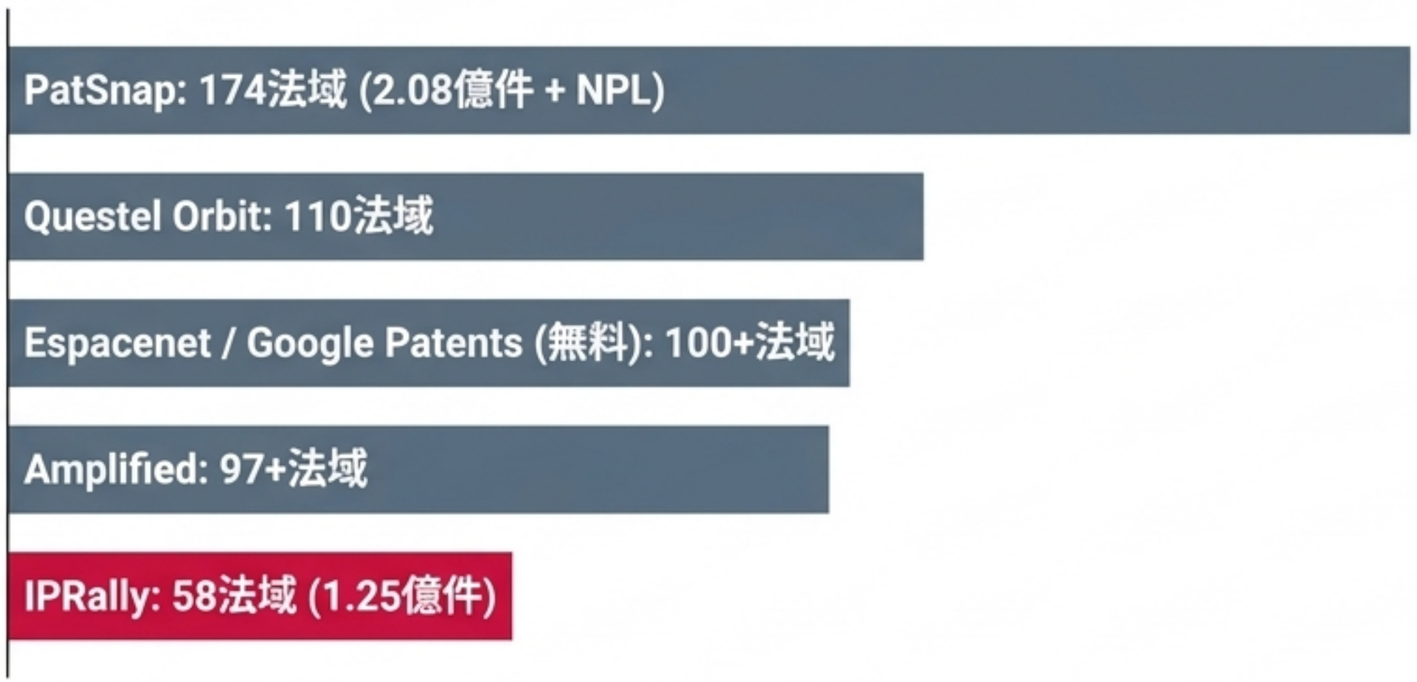
「どのノードにどれだけの誤差（Loss）が逆伝播したか」を重要度として計算。ブラックボックスではなく、AIの思考プロセスを構成要件レベルで分解・編集可能。（特許登録済: US 12,124,802）

テキストハイライト vs 構造の可視化

LLMベースの競合が単なる「類似単語の色付け」に留まるのに対し、IPRallyは不要な特徴を削ぎ落とすインタラクティブな検証を可能にする。

[プロダクトの影] データカバレッジの致命的弱点

特許法域カバー率ランキング



致命的な欠落 (Critical Deficiencies)

- ✕ 収録法域が有料ベンダー中最小（無料ツール以下）
- ✕ NPL（非特許文献）非対応（2027年まで）
- ✕ 意匠検索 非対応

実務上のリスク: 検索エンジンとしての基礎体力が圧倒的に不足。AIの性能以前に、「見つからない」のではなく「そもそもデータが入っていない」リスクを抱える。

[プロダクトの影] 実務家の不満と「監査証跡」の欠如

標準的な実務要件 - FTO/無効調査

検索式の構築

↓

履歴の保存

↓

複数クエリの掛け合わせ（Boolean）

↓

監査証跡（再現性）の確保

IPRallyの現状 - 致命的な欠陥

AIグラフ検索

[欠落] 検索履歴が残らない

[欠落] 検索結果を組み合わせられない

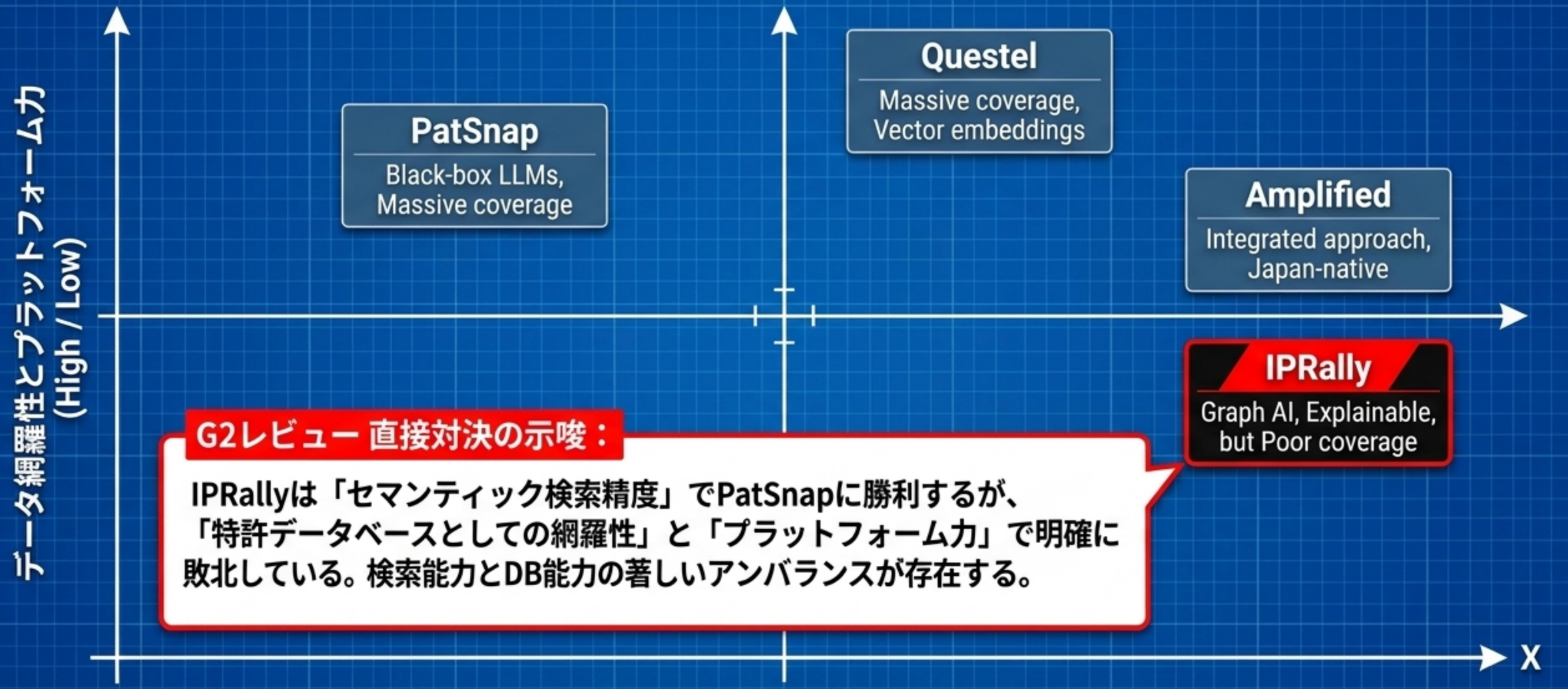
[リスク] サイレントなモデル更新で結果が変わり、再現性が担保されない

ユーザーレビューからの警告:
『検索履歴・監査証跡がない。FTOや無効資料調査のディフェンシビリティ（防御可能性）に直結する最大の弱点。』

結論: 新規性調査（アイデア出し）には強力だが、法的リスクを伴う調査において「何をどう探したか」を事後的に証明できない。

グローバル競合マトリクス

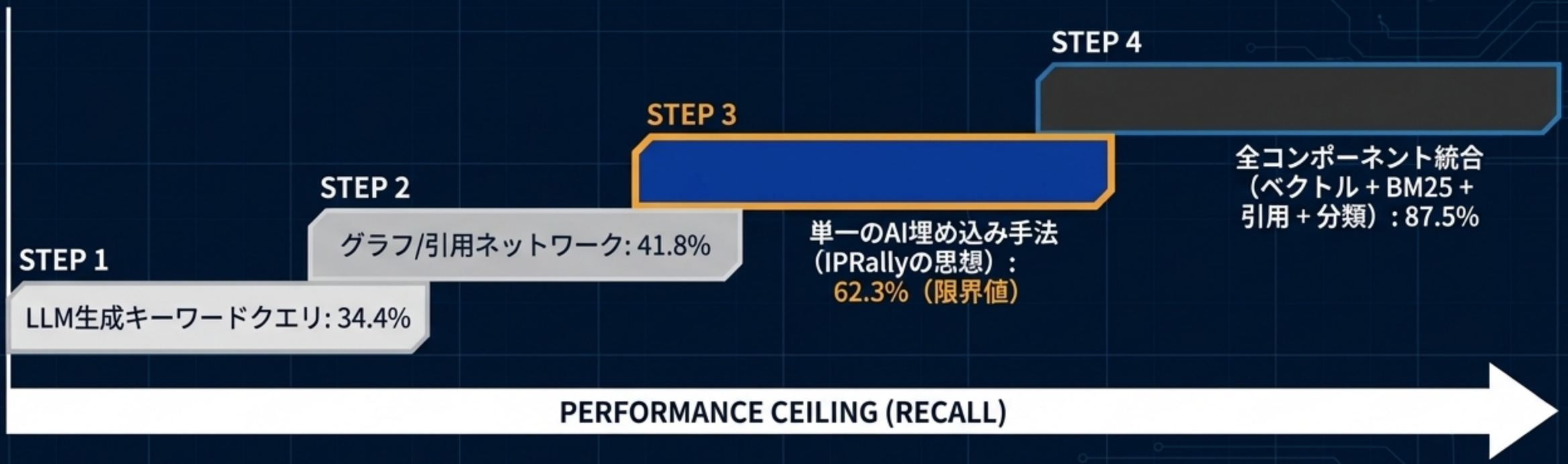
Editorial Forensic Blueprint



G2レビュー 直接対決の示唆：

IPRallyは「セマンティック検索精度」でPatSnapに勝利するが、「特許データベースとしての網羅性」と「プラットフォーム力」で明確に敗北している。検索能力とDB能力の著しいアンバランスが存在する。

核心的な問い「グラフAI vs 統合アプローチ」



パラダイムシフト（The Paradigm Shift)

「優れた単一のAIモデル（Graph Transformer）」に賭けるIPRallyの設計思想への鋭い挑戦。
最新のベンチマークが示す現実は、単一の手法では62%の壁を超えられないということ。
真の知能と精度は、モデル単体の力ではなく、複数の手法の「統合」に宿る。

日本市場における構造的制約

言語の構造的制約 (Structural Language Constraint)

グラフ解析は英語テキストのみで動作する。日本語は常に「翻訳」を挟む二級市民扱いであり、検索精度の上限は「機械翻訳の質」に依存する。

日本市場での孤立

日本国内での商業展開ゼロ（法人、代理店、日本語サポート、導入事例すべてなし）。競合が日本語ネイティブAIを提供する中、極めて厳しい立ち位置。

2025-2026の動向：検索専業からの脱却

ドラフティング領域の資金調達競争 (Competitive Threat)

戦略的示唆: 検索領域のコモディティ化から逃れるため「ドラフティング領域」へピボット。しかし、3～5倍の豊富な資金を持つ特化型スタートアップが先行するレッドオーシャンへの後発参入となる。

総合評価と日本企業向け導入チェックリスト

適性診断マトリクス - Fit / Unfit Matrix	
導入が適するケース - Fit	**導入が危険なケース - Unfit**
・英語でのグローバル先行技術調査 ・アイデアの新規性検証 ・R&D部門での探索的リサーチ	・監査証跡が必須となるFTO・無効調査 ・NPL（非特許文献）や意匠調査 ・日本語入力の精度とレスポンスを最重視するケース ・IPMS連携が必須の環境

日本企業向け交渉チェックリスト 4箇条 - ベンダー交渉時の厳格な確認事項:

1. アドオン（Agent等）を含む実際の年額と最低席数の確認。
2. データガバナンス要件を満たすか（非開示となっているデータ所在地リージョンの特定）。
3. サイレントなモデル更新に対する「検索結果の再現性（証跡）」の担保方法。
4. 無料トライアルのチーム向け延長交渉（標準3日間は検証に短すぎるため必須）。